



73
12
295
2

軍防令講義



東京書院
學校圖書

29
2

軍防令講義卷之二

令義解第

銅盈小釜隨得二口

盈ハ字書子見え以疑ハ盈ノ誤ヲ盈ハ倭名鈔
小説文云盈烏管反字亦作椀辨色立成云末里
俗云毛比小盃也ト云又兼名苑子ハ盆一名盃
といハハハ盃ト盆ト盈ト元おホク物ト志る
盈ハ盆を瓮子作比良加ト云保止岐といハ
保止岐ハ火解なり何物もあハ生ハ物を

令講義 軍防令卷二

〇一

盆子入火イホ入當アツ化ハ解トクるよアと名とせシかる
べハ比良加ヒラカと名平坐ヒラクラかアクラの約ツクカあり此
器ウツハの底平タヒラかシはスる呼ヨベるねアモヒハハ丸鉢マルハチか
又マ一口の約ツクモハチの約ツクとあり今云銅鍋の事
さシと難ナかハふヘ小釜ハ小賀コカ奈閉ナベとよむ
釜カ倭名鈔ナニノシヨ子古史考云釜和名賀奈閉一云末
路賀ロカ奈倍ナベと注シさハ賀カハ鐵カネの省語奈閉ナベハ鍋ナベか
又今鐵鍋ツクナベと知レへハ但十人ツみ二口オホカタかシは大小
の法量サダメハ注シさシと姑ツ大依オホカタ八寸以上の鍋ナベか

ふへハ野陣ノシ入用イユ也る事コトもあハけシハ鍋ナベも
釜カも耳ミミあシと上ウよシ釣ツル如ク造ツクるかハへハ今
の京都キョウトみス往昔ムカシ見ミるノ徑マチ一尺許ハカリ深フカサ四寸余ヨリの
銅アカタ釜ナベの底平ソコタヒラみス縁フチ高く縁フチの四方ヨシ子紐ヒモあシと
紐ヒモを徹トホ樹キの枝エダかんトまカくヘく構カマへハと
田村將軍タムラノシマツの物モノと云イヒへハ形カタりマ安房國ヤナギ吉井キツと
云イヒみス見ミるノ釜カハ大依オホカタ今様イマサマと同トくハあれト
出デせシも四方ヨシ子耳ミミあシと穴アナあシせシは紐ヒモをトホ通ト
まシと釣ツルべシとハ言イハでも知レへハ猶ナ此コ不レ

鍬一具

ふも多く見ゆと由左の之段々々々々云々
 鍬と許云ハ柄おく一具といハハ鍬子柄をけ
 たるおるへ一行軍子鍬を將去ハ令よアと依
 かり後の事おから東鑑文治五年七月十九日
 鎌倉二品奥列進發の条子先陣畠山次郎重忠
 也先足夫八十人在御前三十人令持鋤鍬とあ
 る是なりおとよア降ア々天文永禄元龜天正
 の頃黒鍬衆と云者おから以行軍子志々かふ

とおり蓋令の遺法といふへ一火子一具一
 隊ハ五鍬二團千人子百具と知る

判碓一具

判碓子作るへ倭名鈔子唐式云判碓一具漢
 語抄云久佐岐利と云一火子六駄馬あはバ
 判碓一具を用ふへ但馬六足ハ牽夫六人あ
 るへ此六人宿陣ハ於々草を蒔すハ草を
 判おるへ

斧一具小斧一具

斧名倭名鈔小斧兼名苑云唐韻云鑿音繁漢語抄云乎能一云與岐とある也ぎのヨキとも云といへ今云大割なり小斧ハ今の小割と志る

鑿一具

倭名鈔小鑿野王案子鑿音昨和美所以穿木之器

也通俗文云椀刑音鑿柄名也と云

鎌二張

倭名鈔農耕具子鎌兼名苑云鎌音廉一名鋏音結和名

加方言云刈艾音野王案音祠和名鎌柄也加末都加

と云

鉗一具

倭名鈔鍛冶具小鐵鉗漢語抄云鐵鉗加奈と云

也以上十種ハ一火子貯ふ処と云ハ一隊子

銅盤小釜十口鋏五具剉薙五具斧小斧各五具

鑿五具鎌十張鉗五具と知へ

每五十人火鑽一具熟艾一斤手鋸一具

是ハ一隊子貯ふる處と聞也然ハ地火爐ハ

一隊子一處隊正の居處子限るおるべし一火
 ぶとの火頭盃釜を將來^{モチキタ}糲^{ホシヒ}を熟し各々の
 幕中へ引取^{キトリ}食^{クラ}ふおるへし火鑽^{ヒウチ}ハ石と鑽^カと
 を用おはるるを熟^{ヤイクサ}艾のあるふし知る倭名
 鈔燈火具子火鑽^{ヒキリ}内典云譬^ハ如因^レ燧^ヒ音贊^{音贊和名}而
 得^{ヒガ}生^ラ火^ヲ濕^レ槃^文と云^レ内則子^ヒ左^ニ佩^ニ金^ニ燧^ニ右^ニ佩^ニ木^ニ燧^ニと
 云^レ周禮司烜氏以^ニ天^ニ燧^ニ取^リ明^ニ火^ニ於^レ日^ニ以^レ鑑^ニ取^リ明^ニ水^ニ
 于^レ月^ニ以^ニ共^ニ祭^ニ祀^ニ之^ニ明^ニ盞^ニ明^ニ燭^ニ共^ニ明^ニ水^ニと云^レ註子天
 燧^{陽燧也}といへし陽燧ハ兼名苑子火珠一名

燧

陽燧

陽燧ニ音和名
比止流太万

火精也と云ものおとハ自^{オツカラ}

別物ふし軍中の用子充^{アツ}へきものおらば
 蓋令^{ヒウチ}子火鑽^{ヒウチ}ハ一隊子一^ヒと定められしよ
 遂^{ツレ}子私の刀子おの物を帯るおと^ヒお^ヒ京都
 將軍家の頃四十歳前の人火燧を佩^ヲべからざ
 る由云も元來隊中上首の預^{アジカ}るおし^ヒ若輩
 の任^ヒみあらざれハおるべし又殿中へ佩^ヒお
 きよし云^ヒ行軍の具おし^ヒあり熟^{ヤイクサ}艾一斤お
 小一斤おし^ヒ今乃六十目お^ヒ手鋸^{ノホキリ}ハ倭名鈔

小四聲字苑云、鋸音據和名能保岐利似刀有齒者也と云
 又今ノコキリといふを訛なり但西國人ハノ
 コとの云俯仰の約ありと云又ノホキリハ
 昇切ホキリあるへと云
 又云往昔近江國柏原カハラノラ一宿せし時其の家子
 古くよす傳持たる品々を見しとあり其の
 品々の内子奇と見しを韋ナシレふ造れる袋阿是
 口クチハスカリト太き緒を貫べくかまへた
 是とスカリも半損ナカソク二の三のさか足処々

小殘コノコは依那ヨネ押弘オシヒロめ其法量を詳ツシビシカしを教ツ子
 全く徑ワタリ八寸一分弱の韋ナシレの圓マダラ手あり何を入イレけ
 ん袋フクロと申定めか祓たハラヘか今思へハ熟艾ヤイクサ一
 斤を入へヒウチ火鑽袋フクロふそあはける

每人弓一張

弓ハ梓ソウすツキ檜ヒノキ檀タン柘セキハレふ造る弓あり材キの太フト
 手サキ割ツク造ツク小コある材キのよくふよく法ハクくは
 每人ヒト子切キリ削ケツ自備ミツカラソナふべ但神渟カムヌナ名川耳ナカハ天皇
 の御時ミトキ弓部ワカヒコ稚彦ワカヒコをつく造ツク弓ツクと云ハ公の御

弓タビヒトふタビヒトくタビヒト庶人の弓タビヒトまタビヒトくタビヒトふタビヒトハタビヒトおタビヒトよタビヒトぶタビヒト菴タビヒトからタビヒト以タビヒト
活目イッノイリヒコ入彦イリヒコ五十サチチ狹茅サチチ天皇の御宇カシユゲ子カシユゲ神弓カシユゲ削部ベと
云オホヤケあオホヤケ又オホヤケ是オホヤケもオホヤケ尊長カミノ弓削部オホヤケふオホヤケくオホヤケ至尊オホヤケの御弓削部
かミハカリノユミふミハカリノユミへミハカリノユミ一ミハカリノユミ此弓ミハカリノユミをミハカリノユミかミハカリノユミらミハカリノユミちミハカリノユミ我家ミハカリノユミ子ミハカリノユミ傳ミハカリノユミへミハカリノユミ一ミハカリノユミ身度ミハカリノユミ弓
ふミハカリノユミくミハカリノユミ兵士ミハカリノユミ各々ミハカリノユミ其ミハカリノユミの力ミハカリノユミとミハカリノユミ身度ミハカリノユミふミハカリノユミよりミハカリノユミくミハカリノユミ造ミハカリノユミるミハカリノユミ处
かミハカリノユミるミハカリノユミへミハカリノユミ一ミハカリノユミ

弓ユツルフクロ弦袋フサユツル一口フサユツル副弦フサユツル二條フサユツル

弦袋ツルフクロの製ツルフクロいツルフクロろツルフクロかツルフクロ又ツルフクロけんツルフクロ今ツルフクロ徴ツルフクロをツルフクロはツルフクロたツルフクロらツルフクロかツルフクロ一ツルフクロ副弦ツルフクロ
ハヨムヨヨムサヨムユヨムツヨムルヨムとヨム訓ヨムへヨム一ヨム息長オキナカ足オキナカ姫オキナカ尊オキナカ紀オキナカ子オキナカ儲オキナカ弦オキナカ

とイハあイハふイハ是イハありイハヨイハサイハとイハ云イハハイハ物イハのイハ餘イハ又イハ延イハたイハるイハ
をヨネ云ヨネ辭ヨネあヨネりヨネ食ヨネふヨネもヨネあヨネまヨネ衣キヌふキヌもキヌあキヌまキヌ餘キヌつキヌまキヌはキヌ
戎タツハ貯タツハふタツハふタツハをタツハヨタツハサタツハムタツハとタツハ云イヒ衆イヒ人イヒ子コエ越コエてコエ上コエ子コエ延イヒたイヒ
はイヒをイヒヨイヒサイヒとイヒ云イヒ小イヒさイヒくイヒてイヒ餘イヒ又イヒ延イヒんイヒかイヒたイヒかイヒまイヒをイヒ
ヨイヒサイヒナイヒシイヒとイヒ云イヒみイヒくイヒ知イヒへイヒ一イヒ然イヒらイヒハイヒ弓イヒ子イヒ張イヒたイヒるイヒ
外ホカふホカ餘ホカ一ホカまホカはホカ弦ツレかツレまツレばツレ餘ツレ弦ツレとツレ云イヒ一イヒなイヒりイヒ古イヒ事イヒ
記コト子コト宇コト佐コト由コト豆コト留コトとコトあコトふコトまコト語コトのコト訛コトあコトりコト弦コトもコト今コト
ハツクリ弦ツクリ造ツクリあツクリりツクリぎツクリれツクリをツクリ求ツクリめツクリ用ツクリふツクリれツクリどツクリ昔ムカシハムカシ兵ムカシ士ムカシ
自ミツカラ身ミツカラはミツカラ一ミツカラ造ツク又ツクたツクりツク平ツク家ツク物ツク語ツク子ツク惟コレ能コレハコレ縁ヘン塗ヌリ烏エ

帽子ボレ引柳ヒキカキの直垂ビダレ打掛ウチカケ引肩ヒキカサぬいて弓の弦を
 さしめく居イたる處へ惟コレ村ムラかへり來キタるといふ
 小コ知チへー當時ソノトキの弦ヒ白シロか塗ヌリか審ツギらかあらび
 延喜式御梓弓の條カラムシ子コ藁ワラ三分四銖を以モて弦と
 かきといへとも塗ヌリしとい見ミえは三分四銖ハ
 今の三匁四分三釐七毫五絲ハ子コあは今の弦
 太フトきハ二匁五分細ホソきハ一匁八九分ハよリ二匁
 小コ及ツ小關セキ弦ツル坂サカ弦ヒといふハ巾ハのあリ坂サカといハ藁履ワラジ
 造ツクリ秤ハカリ造ツクリ弦ツル差サシをいふ三家サカなりと云イハふ
と云書子泥洹之道

又京の東清水坂ニミツル子コ弓弦師ワラツツシ草沓師ワラツツシ住シを因ユる
 坂者イラと云フ山城名跡志説ワカレもあリ然シカレハ心ココロあらん武士
 子コ用ヨウひさサしシあリへハ藁ワラをよク績ツギきキ績ツギきキ績ツギきキ
 けケのぎギくク水ミヅ子コ決ケけケよヨをヲかケけケくク日ヒ曝カラ
 志シ凡ヒト米メ四斗シト不フどを鎮シメとト乾カハかハ松マツをむムら
 かカくクひヒくクべベと甲斐國の兵士ヒノシの傳ツタへヘ弓書ユミガキ
 子コいイへヘ
 征箭ソウヤ五十隻胡籛コソビ一具
 征箭ソウヤハ軍行イクサ子コ用ヨウゆる箭ヤなニイクサト云イハ辭コトバる

元射モトモイよ又出イデしあり高天原タカマハラ廣野ヒロノ姫ノ天皇紀ノ子築ノ
 習射所イクサといふみき思ふべしイハ射の本語ノみ
 志イフくクサハカと云辭コトバの延ノビしあり正タシみイカと
 云イヒく射交イカハスの意と志イフるべしソヤとハ背箭ソレヤあり
 といふ説イフもあむと征箭イフ子オラかき又背子オラ負オラへく
 ハ左も有イフめへし儀仗イフの箭ヤも背子オラ負オラハ得イフたる
 説イフともおむしれを延喜式イフを考イフふ教イフ子オラ征箭イフ五
 十隻イフ篋イフ庶イフ揉イフ大半日イフ削節イフ洗磨イフ一日イフ精イフ揉イフ一日イフ精イフ
 磨イフ半日イフ料理イフ羽イフ搓線イフ二日イフ着イフ羽イフ一日イフ造イフ箭イフ一日イフ初イフ

漆ウレシ并乾カハカス一日イフ中漆ナカウレシ一日イフ乾カハカス一日イフ裁羽ハネキリソノ半日イフ次中漆イフ
 一日イフ乾カハカス一日イフ花漆イフ一日イフ乾カハカス一日イフ削箭本イフ搓線イフ纏イフ一イフ
 日イフ打箭イフ鏃イフ錯磨イフ一日イフ着イフ鏃イフ一日イフ漆本イフ三遍イフ每遍イフ金イフ
 漆箭イフ鏃イフ乾イフ一日イフ九長功イフ廿二日イフ大半イフといへり營イフ
 繕令イフ子イフ四イフ五イフ六イフ七イフ月イフを長功イフといふ是イフみき思イフへ
 ハ箭本イフ搓線イフ纏イフ着羽イフ上下イフをかイフり漆イフして篋イフを
 ば漆イフぬものと志イフら然イフハ漆箭イフ子イフ對イフし素箭イフ
 と云イフみきもあはべきみや五十隻イフを一具イフとき
 教イフとハ西土イフも亦然イフ詩イフ子イフ東矢イフ其搜イフと云イフ注イフ子

五十矢為東と見え漢書刑法志に魏氏武衣三
 屬之甲操十二石之弩負矢五十个と云了但馬
 國天平九年の稅帳に造箭三百三十一具料絲
 二斤十兩具分半分と云了二斤十兩ハ今の百五十
 七匁五分あり六匁を三百三十一に歸ハ凡四
 分七釐五毫八絲子當る一箭子用ゆる絲九毫
 五絲許みあははね又一兵士五十隻おれハ一
 火子五百箭一隊子二千五百箭一團五百人子
 二萬五千箭二團千人ハ五萬箭なり奥列征伐

の時畠山次郎重忠先陣あり匹夫五十人別荷
 征箭三腰以兩皮と東鑑に之也百五十腰を七
 千五百箭あり胡籙ハ箭を盛器なり葛ツラみく纏ヒキ
 法くれふを狹葛サカツラ胡籙エビラといふ其胡籙を熊皮エビラに
 て畏ツこゝを熊の狹葛サカツラ猪皮エビラみく畏ツこゝを猪の
 狹葛サカツラと云イヒあり然る哉熊猪の頰ツラの皮を逆サカに
 張たせば逆頰サカツラといふと思ふハ誤なり又さくを
 殺胡籙サシエビラとも云殺弓イフサツ子具サツしたれハ然シカ云あり
 太刀一口刀子一枚礪石一枚

太刀ハ衣服令子衛士帶横刀といへり唐六典
 武庫令子刀之制有四儀刀古班劍之類宋晉以來謂之御刀後魏曰
 長刀皆施龍鳳環隋謂之障刀以身障障刀佩刀陌
 儀刀裝以金銀羽儀所執障刀也横刀也陌
 刀長刀蓋古斷馬劍魏といふこの横刀を爰も
 武帝有露陌刀銘也といふこの横刀を爰も
 移されしと知るれハ横刀ハ元我邦の制も
 其あらは太刀の太ハ大を善といふ古事記子都
 牟刈之大刀草那藝之大刀生大刀頭槌之大刀
 とをべり大子作らぬ西土みても大横刀大刀
 頭皆大ニ作れり刀子ハ古事記子海鼠の口を

折たる天守受賣命の紐小刀ホコリノミコトまゝ火遠理命
 の和迹の頭子ツケ着るかへり玉ひり紐小刀ホコカタナまゝ
 ハ依比と云ものよして依比とハ副ソレの轉カウレれる
 ちり小刀を副といふ由ハ日本紀子勾カフ驚都々
 伊イ異志都々伊イあア異志イシ多タ推ウシの省語ウケレふれハ推
 小の意をイシあアち小刀イシなナり小刀イシハハかカらラび大
 刀子ソノ副ソレたタせセハハさサてテ副ソレとトもモいイふフ形カタりリ末スエ々ク至キ
 てテもモ一ヒト尺シヤクまマりリハハ五イヒ寸シユン以ヨリ上ノのノ刀子ソノハハ延ノボ喜キ式シキ子
 見え出羽守齊頼の腰刀コシカタナ九寸クニシユンをカりリとトいイひヒ又

巴御前トモ七寸五分のカタナ刀子來國俊の九寸三分の
カタナ刀子來國次の四寸七分の刀子肥後の菊池刀
五寸六寸あるひも七寸九寸口ありと云イフ装モラヘハ
葛ツラサヤキ纏ナシ鞘サヤ中ナカ々々章ナシ纏ナシ錦ニシキ纏ナシ唐木カラキ鞘サヤ欄ソカなどの品々
あるへし礪石トシハ普通乃ちもの形はいふ及
カハ

蘭帽ワカサ一枚

蘭ワカサを編アミ造ツクる帽カサか又後世蘭ワカサを種々シツシツ手テ裁ツク盡ス
志シ組クミ々々裁ツクめの上ウエ又麥稿ムギハラを染シメる品々の文アをか

はるを文ア蘭帽ワカサといふ一日風流ハレの設セか又カハ
今ハ故實コジツより又カサ蘭帽ワカサハかからん志シ々々を
あつゝカサかれるもあつゝ帽カサの頂上タカを丸マく高タカく
造ツクるも髻モウリを入イる料リョウかよは今ハかくてもよ
裁ツク舊フル形カタチのよカサ子ソル製シ者モノも志シらカサ命ツク製ラ者スルも知シラ
志シらあカサ又カサける江戸エドみハ品川シナガハの大森オオモリの近江屋チカガヤ
清九郎シヨウキウラウと云イフの計ハカリあカサを造ツクるをばあカサらカサひ
志シれ又カサ備前ビゼンの家人カネダも細コユ人ヒトあカサ又カサ予コもカサ志シれカサも
造ツクらカサをカサ元モトよカサ又カサ形カタチハカサあカサ又カサ一ヒト様サマか

るべから以

飯袋イシクタイ一口

飯袋を糶ホシヒをいじり釜子浸ヒタを袋フクロなり芋ヲすゝる

草カネかどみり作る糶ホシヒ六合いはいく大きき子造ツクふ

なり今ベントウといふハ飯袋イシクタイの音轉

水甬ミヅフタ一口鹽甬シホダ一口

水甬鹽甬ともみ定キカれる法量ありとも聞キカを

脛巾ハキ一具鞋ワキジ一両皆令自備不可闕ム少

義解子謂紺布幕以下並皆私備也といへ又衣

服令み衛士クシ皂纒頭巾ソウケン挑漆衫チョウシキ白布帶シロフタビ白脛巾ハキ草ワラ

鞋ツツとあり衛士兵士モト元より同一ければ此脛巾ハキ

も白脛巾ハキあるべし鞋ツツハ紐ナヒを三付ツケしと二付ツケ

付ツケしとの別あり然サテ此の十四品の兵士自備し

て闕少をべからむと云イフありこの佗ホカハ衫シと袴ハカマ

を内衣ウヂカミのこなれと是コレハ云イフみ及およむをねバあり子

注シレさせばと知シルべし甲曹ヨロヒカサトハ官物クワンモノみり行軍イケンの

時トキ臨シムこり出デし給タマフものなり但馬國タマノクニ天平九年

の税帳サイ又年料修理器仗キウ甲十三領カウ箭ヤ三百三

十一具・大角一口・小角一口・弓五百五十五張・槍七十四柄・振鼓フリソノミ五百・鑼一柄・楯四枚とあるより考へし兵士自備の弓矢乃外子官物もあつたと聞ゆ次子騎兵隊の鞍クラ・燈アミ・鞆キツケ・脊ハダ・履チカラカハ・鐙ヲシカケ・鞞オモツラ・轡クツハ・鞍ササ・腹ハラ・帶オビ・泥障アラリ・鞍クラ・覆フヒ・馬衣ウマキヌ・鞭ムチ・槽ウツラ・洗スツラヒ・桶ツケ以下の具かくのあふべからば駄馬マ子用ゆる時の結鞍ムスビクラを用ふへし結鞍ムスビクラの鞆キツケ・脊ハダ・履チカラカハ以下より自別あつ然れハ令條の外子自備の具猶多しと知へし且馬ウマ・戔ヒキ・引ナハ・繩サシ・差ナハ・繩ツツ・沓ツツ・籠コ等々の品多くあつ是等

の器仗モチユツを將去モチユツふハ六駄の外子猶多くの馬かく有べからば讀本の懇マ子求め可あは行軍之日自盡將去

征討子向ふ時の紺布幕以下二十七種をべく將去モチユツべしとぬ然しハ一隊子紺布幕五口・銅盃クサキリ・小釜十口・釜五具・剉ヲノ・碓五具・斧五具・小斧五具・鑿ノミ五具・鎌カキ十張・鉗カサヒ五具・火鑽ヒウチ一具・熟艾ヤイソサ一斤・手鋸テノコ一具・弓五十張・弦袋五十口・副弦ヨサユツル百條・征箭ソノヤ二千五百隻・胡篳ヤナクシ五十具・大刀五十口・刀子五十枚・礪ト

石五十枚・藺帽^{キカツ}五十枚・飯袋^{シタイ}五十枚・水甬五十口・
 塩甬五十口・脰巾^{ハキ}五十具・鞋^{ワラック}五十両・糒^{ホヒ}三十石・塩
 一石あるへしあはれ戎駄馬三十疋子^{オハ}負さしむ
 侍と知べし

若上番年唯将人別戎具自外不須

義解子謂上番年者向衛防之年也人別戎具者
 弓以下鞋^{ワラック}以上是也自外不須者紺布幕以下手
 鋸以上上番之年不須将行也といへりたといへ
 ば兵士二十一歳我國の軍團に入課役を免^{ユル}さ

れ明年ハ休歳か^レ然れとも徭役を免^{ユル}さ^レ也二
 十三歳ハ京子^ノ上^ノ又三衛府子配して衛士とか
 又課役共^ニ免^{ユル}され二十四歳ハ國子かへり
 休息し徭役を免^{ユル}さ^レ也二十五歳ハ防^ノふむかひ
 課役を免^{ユル}さ^レ也二十六二十七歳ハ防^ノ子あ^レり
 二十八歳國子還^リ又二十九三十歳ハ休年徭役
 を免^{ユル}さ^レ也三十一歳中^ノ團子入三十二歳ハ休
 年三十三歳ハ京子^ノ上^ノ又三十四歳ハ休年三十
 五歳ハ防^ノ子向^ヒ三十六三十七歳ハ防^ノ子在^テ

三十八歳國子かへり三十九四十歳ハ休年四十一歳中ノ團入四十二歳ハ休年四十三歳ハ京上^上り四十四歳ハ休年四十五歳ハ防子向ひ四十六四十七歳ハ防子ありり四十八歳國子かへり四十九五十歳ハ休年五十一歳ハ團入五十二歳ハ休年五十三歳ハ京上^上り五十四歳ハ休年五十五歳ハ防子向ひ五十六五十七歳ハ防子ありり五十八歳國子かへり五十九六十歳ハ休年六十一歳ハ老の部

入を以て團を放免せらるるなり然ハ二十歳より六十歳より四十年の間入團四年
 二十一三十一四 衛士四年 二十三三十三四 防^防
 十一五十一か^か 衛士四年 十三三十三か^か 防^防
 十二^年 二十五二十六二十七三十五三十六
 三十七四十五四十六四十七あり
 なり令より五百年の後より兵士京上^上る哉
 十年一度の大番役と云^{イヒ}て鹿嶋の文書入も
 見ゆ
 凡兵士上番者向京一年向防三年不^ス計^ラ行程^ヲ
 不^レ計^レ行程^トと云^ハた^トへハ延喜式子行程一日

大和河内攝津二日、和泉東海道伊賀上二日伊
 勢上四日志摩上六日尾張上七日三河上十一
 日遠江上十五日駿河上十八日伊豆上廿二日
 甲斐上廿五日相模上廿五日武藏上二十九日
 安房上三十四日上總上三十一日下總上三十日
 常陸上四十五日と云如く國々より京へ上る
 行程式あり路糧を給ふ上ハ二日の路糧
 下ハ一日の路糧と云定めあり然る上番の
 年ハ課役とも免さるレハ路糧を給ふと

云とあり知ハ賦役令より正丁起役之日長官親
 自點檢并閱衣糧周備然後發遣と云義解より歳
 役日糧及往還程糧也といへバ起役の正丁猶
 公糧を給ふ以矧や上番の兵士をや
 凡弩手起教習及征行不須科其弓箭
 豊御食炊屋姫天皇二十六年より高麗使來り
 隋俘虜及び鼓吹弩拋石之類を貢獻せと云ハ
 大寶より八十二年前の事なり然れども弩
 息長足姫皇后の制りたまふ所と云ハ元より

我國の戎器は又義解は謂は兵士習は弩者也と云
 は起教習の解あり教習とハ兵士一隊五十人
 の内は弩を習ふ兵士をいふ其藝の成たる
 をハ弩手と名付く一隊は二人五百人一團は
 二十人千人二團は四十人ある戎均く番ふ入
 志むる由下はハ又謂は兵士隨身は弓箭也言
 習弩之士不備隨身は弓箭其餘物自依上條備也
 と云ハ弩を習ふ兵士ハ教習中は又征行は及
 ぶまく自身持前の弓箭ハ備へ以とりよと

那は又但弩ハ倭名鈔は兼名苑注云弩音怒和名
 黄帝造也とあり善相公封事は神功皇后の初
 制はせ玉ひ一は処はる他國は有とり此國の
 器乃効利は如きとハハは機發の巧妙はると
 推量は又志るへ陸奥出羽太宰府壹岐對馬長
 門因幡伯耆出雲石見等の邊要地は弩師を置
 け肥前肥後伊豫等は同一師をたかしり
 延曆十六年太宰府の弩師を停廢せらは其後
 置けかしり延喜乃頃はいとては機發を

用ふるよゝを知らずは至るゝとねり陸奥十
 二年の軍に弩を用ひよゝ記したれ其頃
 まゝの傳をよゝみや今の其器たゞ知人かゝ
 矧イシヤ弩の伎ワザをや信克昔手弩と云ゝものみてり
 や有アラんと思ふ弩を藏せり戰國策に蘇秦為楚
 合從元戎以鐵為矢長八寸一弩十矢俱發と云
 如く長一尺一寸許ガガの矢十本を一箱に納め次
 第に發とは如くせゝ弩あり諸葛亮の元戎と
 名付ゝ弩に矢長八寸一弩十矢俱發といへば

蘇秦が造りゝ弩と同じきみや周尺より八寸
 と云イフハ今曲尺カサレの五寸三分強の矢なり殺法令
 一張弩後左廂丁字立當弩八字立高テ搯手屈ソラ衫
 襟左手承撞右手迎上當心者張張有闊狹左脛
 右膊還復當心安箭高舉射敵遠搯弩頭敵近平
 身放敵在左右回身放敵在高上挈脚放淵鑑類
 二十といふハ弩の張發を記し盡せり又趙公
 王琚の教射經に弩張遲臨敵不過二發所以戰
 陣不便於弩非弩不利於戰而將不明於弩也不

可離於短兵當別為隊攢箭注射則前無立兵對
 無橫陣復以陣中張陣外射番次輪回張而復出
 射而復入則弩不絕聲敵無薄我といふも弩を
 用ふる形勢を法くしたる弩も手もく張と足
 もく踏く張と二のあり手もく張ハ漢書子擘
 張といふ以足踏者曰蹶張とあれば漢代より
 去る可見ありと云へ唐六典武庫令も擘張
 用弓木單大木單竹竿大竹竿伏遠の七種を載
 せり兵士子擇材勇者為番頭頗習弩射又有羽

林軍飛騎亦習弩凡伏遠弩自能施張縱矢三百
 步四發而二中擘張弩二百三十步四發而二中
 用弓弩二百步四發而三中單弓弩百六十步四
 發而二中皆為及第といへ唐の一步ハ大尺
 五尺か又大尺ハ曲尺九寸六分か是は唐の一
 歩ハ曲尺もく四尺八寸も當る三百歩ハ今の
 二百四十間なり二百四十間もくく四發二中
 ハ五分の中あり今の町あり二百三十歩ハ今の百
 八十四間なり今の三町四間あり二百歩ハ今の百六十

間あり 今の二町四 四發三中ハ七分五釐の中

お又百六十歩ハ今の百二十八間なり 今の二町八間

マカ

九軍團每一隊定強壯者二人分充弩手均分入番
一軍團五百人なまハ十隊千人ハ二十隊お
又一隊二人を弩手とおハ四十人あるを四人
法ハ十番とおまハ五人ハ八番とおまハ其
團ハよ又ハ差法あるハ義解ハ總計隊別之
弩手均分入番と云又

凡衛士者中分一日上一日下

職員令ハ衛門左右衛士三府ハ衛士と擧られ

て員ハ延久本日本後紀 類聚國史百 延曆

二十四年十二月壬寅 日七 公卿奏議曰伏奉綸旨

營造未已黎民或弊念彼勤勞事須矜恤加以時

遭災疫頗損農桑云々臣等商量伏望所點加衛

門府衛士四百人 減七 左右衛士府各六百人 減

百とあれば三府子一千六百人の衛士と知る

然るハ此年災疫ハよ又二百七十人減せられ

志かむども永代の例といはるこを以延喜左衛
 門式子宮城門者並令衛士衛之美福郁芳待賢
 陽明上東達智等門左府衛之皇嘉談天藻壁殷
 富上西安嘉等門右府衛之但朱雀門左右相共
 衛之偉鑿門左右隔年通以衛之とありて衛士
 三百二十人衣并袴料とありて左府子八門右
 府子八門合せて十六門と知へて三百二十人
 を八門子分る一門四十人びあり然らば
 一隊五十人の衛士四十人當直一十人の廬守

ふく宿所子在と聞ゆ右も同く三百二十人
 當直とへけむの合せて六百四十人なり是の
 衛門府左右と分る時の制あり令の定めむ
 衛門一府かむども宮城門の後と同く十四
 門あり十四門を四百人ふく衛ると云一日上
 一日下と云又五日給假と行夜とを以て計れ
 ハ一日八百人ふく十六隊かれども宮城門南
 面正中朱雀門子二隊北面正中偉鑿門子二隊
 餘十二門子一隊ひく合せて十六隊あるべく

一隊五十人を中分し二十五人の宮門に當
 直し二十五人の宿所に在て午時より弓馬用
 刀弄槍以下の武藝を教習し夜に行夜を勤む
 るかほへ宮衛令と合然し其の明の日は
 又給假五日おれは十六隊より六番九十六隊
 四千八百人の衛士と志ら敷一日上ツルとの宮門
 入當直をほをいひ一日下との當府に於て午
 時より弓馬用刀弄槍の武藝を教習するおれ
 へ全くの休暇にあらは左右衛士の衛る内ガイ

裏正南中門後建禮門 南面東掖門後の春華 南
 面西掖門後の修明 東面宮門後の建春 西面宮
 門後の宜秋 北面正中門後の朔平 北面西掖門
 後の式乾 合せ七門なり七門に千二百人と
 門あり 云は二十四隊あり二十四隊を南面は八隊北
 面は四隊東面は六隊西面は六隊と配し是も
 亦衛門と同しく中分し南面は四隊北面は
 二隊東面は三隊西面は三隊合せ十二隊六
 百人當直し十二隊は行夜を勤む然し其の明の

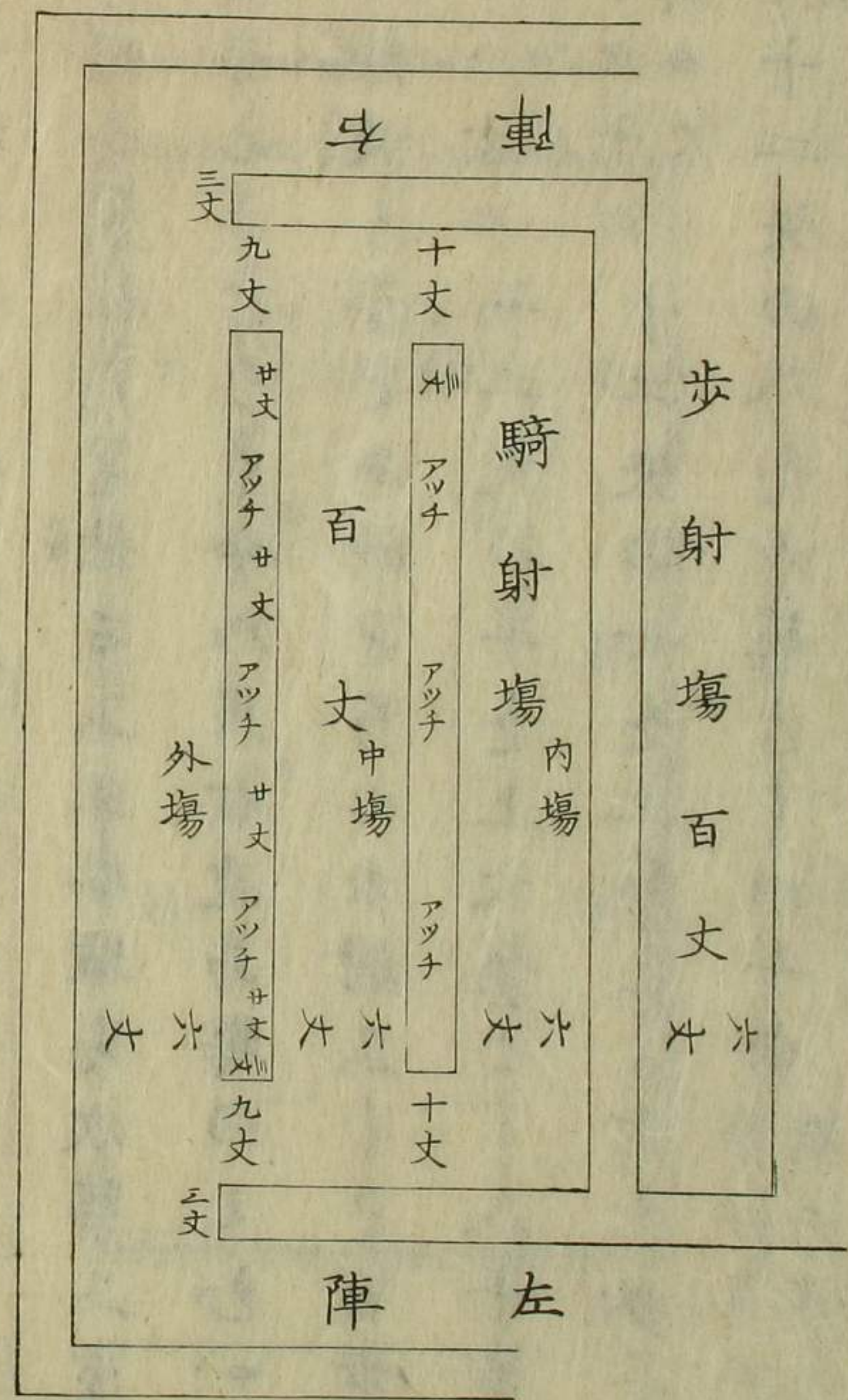
日よつ五日給假を依る左右衛士府に衛士七
 千二百人あるへ左右衛士百四十四隊の當
 直給假の刻合へ前より出
る衛門府の衛士九十六隊の刻合と同く
七日目の當直を止へ別な圖をいたさ
 毎下日即令於當府教習弓馬用刀弄槍及發弩拋
 石

刊本より一日下の下は謂無事故日の六字あり
 是ハ下の字乃義解あり事故といハ元日及會集
 并蕃客宴會等の日をいふ是等の日の總上と
 されこの當府といハ衛門府左右衛士府を云なり

此三府内より弓馬の教習所ありと知る藤原宮
 大内圖より考ふるに左右衛士府の占地
 南北八十四丈東西四十丈形は八十四丈ハ今
 の六尺一間の法より百四十間に當り四十丈
 形は今の六十六間四尺あり溝犬行垣基等を除
 き全く南北七十九丈三尺形は五尺一步と
 て百五十八步三尺あり六尺一步として
 百三十二間一尺東西
 ハ三十九丈三尺五尺一步より七十八步三尺
 六尺一步より六十五間半あり

の裏におつゝを寫さ

軍團教場圖 天平四年圖



百丈も今の百六十六間餘あり四十丈ハ六十
 六間四尺あり六十丈ハ百間あり八十丈ハ百
 三十三間二尺あり蕪坂源太ハ三十三間堂二
 だけ射たるも今の百四十三間子當るまで子
 上藝子超たり信克より子弟も中藝下藝の者
 為何程もあるへ明の太祖の洪武六年日本應安
 六年癸丑 歩兵を教練まはるかから以弓弩槍
 を善せしむ歩射ハ十二矢の半遠可到と云ハ
 将弁百六十歩軍士百二十歩近可中と云ハ五

十歩あり明の一步ハ日本曲尺カネサシ五尺三寸七分
 六釐ム准以因て五十歩ハ日本の四十四間四
 尺八寸ナ又百六十歩ハ日本の百四十三間二
 尺一寸六分ム准以三十三間堂二たけと同
 明の弓長短ナ然シ能如是ハ時ハ的ト弓と
 武射と同シからぬと成會得キへシ唐六典兵
 部侍郎掌ル貢舉ヲ有二科一曰平射二曰武射是レよ
 よハ唐の時も禮射と武射と二科ありシか
 又騎射の六的ハ左陣の騎士外場を騎リ内場

ふシ三的を射法ズ中場ム入ル三的を射
 外場ニ本陣ム還入ルぎの馬蹄圖左巴字を
 かシ次ニ右陣の騎士外場を騎リ内場ムて
 三的を射中場ム三的を射外場を本陣ニ
 還入ル左陣と同シ馬蹄圖右巴字をかシこれ
 を衛士の六的といふ左右皆中成上大藝と
 左三右二を上藝とシ左右各二を中藝とシ左
 二右一又ハ右二左一を下藝とシと云用刀ハ
 今の劍術なり今ノ藝といふも乃即鹿島子傳

之也。天真正乃圓劍。かふへ。鹿島天真正の
 傳、紗を考ふる。ふ鹿島大神宮、健葉槌命、國摩大
 鹿島命、雷大臣命、阿麻毘舍鄉、大谷豊隈、大鹿島
 連と相傳。國摩真人、子い。又、劍法初祖大
 鹿島正、紗司と稱。以國摩真人、よ。又、郷男鹿島連
 と御饌子大連と。子傳。ふ郷男鹿島連、ハ活磨子
 傳へ。活磨ハ國摩大谷と。村兒と。ふ傳。御饌子
 大連ハ鎌足藤原卿。ふ傳。ふ是。子於。鹿島の劍
 法三流と。か。國摩大谷。よ。又。四十七傳。下

總香取郡飯篠村、人山城家直、入道長威齋。ふ至
 又五十一傳。く塚原景則、入道ト傳齋。子至る
 之。い。ふ。是。香取鹿島二流。乃紗祖。か。又。弄槍の弄
 之。玩也。と義解。子。之。今。按。ふ。正字通。弄字註。子
 龔遂傳。赤子弄兵。潢池。と云。を以。く。考。ふ。也。ハ。弄
 兵の字。を。で。子。漢代。よ。又。聞。え。たり。然。也。ハ。玩戲
 の義。子。あ。ら。以。と。知。へ。弄字。玉。を。う。く。は。入。兩
 手。を。開。く。捧。持。を。は。や。ち。形。れ。ハ。兩。手。を。開。て
 槍。を。握。よ。又。弄の字。を。充。へ。あ。る。へ。槍。ハ。木。兩

頭銳者即戈之屬也トキと義解イハへマ但木兩頭
 銳トキハ王篇の注ナリ義解全ク王篇ニよリ
 たり皇朝ニ兩頭銳者アリハ有ルへラらズ
 日本紀ニ槍ヲホコと訓ヨム新羅ノ天日槍ノ出石
 槍ヲハ中大兄皇子ノ入鹿ヲうちシ長槍ヲ
 又ホコトハ秀發ノ詞ヲ形ヲホオハホと約ヨリ
 コルヲコト約ヨリ谷川ノ清ハ火發ノ又ヲ矛ヲホコ
 コト訓ヨム和名ニ鈇ニ名ヲ保ホ古トよリ
 武文化ニ中備ニ中國ノ窪屋郡ノ福島村ノ八間ノ樋トハハ

処ニ掘ヲ出シせテ戈ノ今ニ其村ノ熊野神社ニ寶
 物トして現存ス以テ是歲ニ吉備宮ノ乃チ神主ト大藤某將ト
 來リ示シさシはハ因リぎノ形ヲを審ミまシはハを得たリ
 又ハ長一尺又廣一寸四分莖長四寸六分重今秤
 百錢ニむカハノ大八兩二銖奇大一兩ハ今秤ノ
 一銖ハ四分六分八釐七五子准ハハあり血漕ノ廣一寸一分長
 又ハ八寸四分あり血漕廣矛トハハへハ日本紀
 小比比良木銚ト云ハ是ハハハへハ鋤ト也ハ鐵
 又ハ是ハハハへハ宜ナリ發弩ハ撃手ノ

藝をいふ抛石ハ作機械擲石擊敵と義解子云
和名鈔イシヒキ小旛イシヒキ四聲字苑小旛音繪和名以之波之
木建大木置石其上發機以投敵也といへ又建
大木イシヒキ云々ハ説文乃説なり

至午時各放還仍本府試練知其進不即非別勅者
不得雜使

一隊中今の二十五人の御門に當直をよび
上イシヒキと云二十五人の府に在故子下イシヒキと云交替の
刻令子明文かゝ恐くハ開門鼓入をるからん

開門鼓寅刻かゝハせよ又午時より四時を
教習の時とす午より後教習場を放還しそよ
より行夜子出立と聞ゆ下日教習の藝を衛門
左右衛士府の督試練しそ藝の進むや不イナやを
知へしと知り別勅子非せハ下日の者を雜使
をへやら以と云ハ行夜あれハ知り
凡兵士向京者名衛士火別取白丁五人充火頭
衛士一火十人子白丁五人を充アテ火頭とをかき
といふなり火頭とハ炊爨ツカサトを掌るものをいふ

かるべし一人の定あり 一隊は二十五人あり
 べし一衛士をへり 一萬二千人ありは白丁六
 千人と志らる此コト白丁ケシ蠲免之法一同仕丁と義
 解コト蠲免ハ除と同コトと玉篇コト蠲免コト蠲免コト蠲免コト蠲免コト
 賦役令をこれハ仕丁免課役とあり課役と云
 ハ租調庸とも免ユルさるるを云イフ

守邊者名防人

義解コト其防人者不充火頭也といへば邊サキとハ
 陸奥出羽佐渡對馬多タ禰ネをいふとありとも防サキ

人モリハ太宰府ツケに付らねといへば專九列の地
 不至らコトめコトとコト聞キコ也壹岐國人藤原重足シゲタリ云
 壹岐國アン天命ミコト開別ヒラカス天皇三年對馬壹岐筑紫國
 防と烽とを置れコトと日本紀コトに見えコト其
 跡今もたコトかコト存コトとコトかたコト

軍防令講義卷之二 終

軍防令講義卷之二 終

